

浄土真宗本願寺派 西光寺寺報

「Kの時代」

若葉の萌える季節となつてまいりました。門信徒のみなさまにはますますお念仏ご相続のこととお慶び申し上げます。

しかしながら、世の中を見てもみると、相変わらず国と国の争い、国の中での争い、凶悪な犯罪が報道されない日はなく、日々心を痛めている次第です。月々のお参りに行かせていただいているご門徒さまのお話の中でも、「もう、毎日ニュースを見ていると嫌になつてしまいます。」とのお言葉をよく聞かせていただくところでは。

ある人が、21世紀は『Kの時代』つまり、カキケコの時代であるとおっしゃいました。悲しい時代、厳しい時代、苦しい時代、険しい時代、困難な時代であるというのです。なぜこういうことが言われるような世の中になつてしまったのでしょうか。言葉に表せないほどの厳しい時代であつた戦時中ではもはやありません。その日の食べ物にも事欠くような時代でもありません。いまや、飛

行機に乗れば地球上のどこにでもわずかな時間で行けます。世界のどこにでも家の電話から電話できます。地球の裏側で起こつた事件でも、10分後には日本で報道されます。自動車が空を飛ばないこと以外は、鉄腕アトムさながらの情報科学時代であるにもかかわらずです。

私（若院）が小さいころ、昭和45年に大阪で万国博覧会が開かれ、21世紀は夢のような未来になると思ひました。科学技術がすべての人類の生活を豊かにしてくれると信じていました。しかし、現実はどうだつたでしょう。人間の活動による環境破壊、原油をはじめとする資源をめぐる国と国の争い、最近では水をめぐる争いも激しさを増しています。技術の発達により産み出された核兵器や生物兵器、1年間に8千種類以上も作り出される新たな化学物質。インターネットの発達により、見ず知らずの人が一緒に犯罪をしたり自殺したりなど、技術の進歩は私たちにどんな豊かさを与えてくれたのでしょうか。まさに悲しく、厳しく、苦しく、険しく、困難な時代になつていっているのではないのでしょうか。

ヒマラヤ山脈の中にブータンという国があります。ついこの間まで王国でした。この国では王様が善政をしき、王は民を思い、国民も王様を慕い、すばらしい関係を築いて

いました。あるとき王様が、まだ電気も来ていない山中の村に電気を引こうと言つてくださいましたが、村の住民は、「王様、たいへんありがたいのですが、電線を引けば鳥たちが飛んでいるときに電線にぶつかつて死んでしまいますから。」と断つたそうです。こんな素敵なブータンも、王様が「わが国も情報化の波に乗り遅れるわけにはいかない。」とインターネットを開放してからおかしなことになつてきたといひます。それまで、のどかなブータンの生活に満足していた住民たちは、インターネットで欧米の華やかな生活を知り、自分たちの生活に満足できなくなつてきたのです。その思いは徐々に膨らみ、ついには国への不満、王様への不満へと変わつてきたのです。知らぬが仏とはよく言つたものですが、情報を知るといふことは、良いことばかりではないのだと、情報化の時代になつてからみんながわかつてきたのではないのでしょうか。でも、もういつたん知つてしまつた情報はどうにもなりません。いきおい貪欲、瞋恚、愚痴という煩惱によつて、真実を見る目は失われていきます。

しかし、私たちの生命の営みは、お釈迦様の時代からなにひとつ変わつていません。誰もが老い、病を得て、娑婆の生命を終えて死んでゆかねばならないのです。富める人もそうでない人も、社会的地位の高い人もそ

